

8、感謝

「道」を具現した親の子を思う慈悲の心は、人の自然の道であるが、この親心に応える子心も、また、人の自然の道といえよう。たとえ、自分を犠牲にしても、わが子の幸せを願う親心に対し、子もまた、私情を捨てて応えようとする。その純粹な心情の動きには、何のこだわりもわだかまりもなく自然である。そして、その子心の中心にあるのが感謝の心なのである。

さて、一本の草木にしても、それが成長していくには、限りない大自然の恵みがあつてのことである。太陽の光、水、大地とその恩恵は数えきれない。人にあつても同様である。限りない自然と社会の恵みがあつて、はじめて生かされているのである。

まずもって、人が生きていくためには、衣食住が必要であるが、その衣類の一つをとってみても、自分で作ったものは何一つないのである。食物も住宅も、また同じである。ここからすれば、人はみな、他人の恩恵のなかで生かされているということになる。しか



いよ長浜町バスキュール式大橋の夕暮れ

も、その衣食住が、他の生物の犠牲において成り立っていることを思えば、人はまた、万物の恩恵に浴しているということにもなる。

そればかりではない。もし、太陽の光りと大地の恵みがとだえたとすれば、どうなるか。一切の生物は、その生命が絶たれるはずである。とすれば、人をふくめて一切の生物は、すべて、天地自然の恩恵のなかにあって生かされている、ということがわかるうと思う。

このように考えてくると、人はみな、天地自然、人事社会の恩恵のなかにあって、はじめて生かされている、ということに気付くはずである。そして、この恩恵に対し、報いたい感謝したいと思うのは、それは、人としての自然の心情であろう。

ここにいう感謝とは、有り難い、勿体ない、という心であり、私心も打算もない純粹なまことの心情をいうのである。そこには、私利私欲に動く心も、権利を主張する心もなく、あるのは、純粹なまことの心だけである。この、まことの心を内に秘めて感謝の生活をするとき、そこには般若心経の「無罣礙」の世界が開け、不安も恐怖もない、安心感と幸福感に包まれた、不退転の人生を過ごすことが約束されるはずである。

かくて、感謝の心とは、慈悲深い親心に報いようとする子心であり、それは、自然に法った人の道だということができると思うのである。